産学官協働の「２００５年の教室を考える会」

― 新しい研修観から生まれる新しい学びのスタイル ―

静岡大学情報学部情報社会学科　教育情報システム研究室　助教授　堀田　龍也
金沢大学教育学部　教育実践総合センター　助教授　中川　一史
２００５年の教室を考える会 実行委員会代表　バディ・コミュニケーション（株）大笹　いづみ
http://horilab.jp/030125class2005/

キーワード：２００５年の教室，産学官協働，参加型，コミュニティ，評価，新しい学びのスタイル

１．はじめに

研修会や研究会というと、どんなイメージをお持ちだろうか？実際に「２００５年の教室を考える会」を今までに企画・運営・実施・評価してきた中から、各地の教育センターでの研修、企業での研修、学校内での研修、はたまた、子どもたちへの授業でのヒントになりそうなエッセンスを紹介させていただく。

２．新しい学びのスタイルを求めて

この研修会は、参加型、協働、コミュニティ、評価等をキーワードにした新しい研修観でデザインされている。このキーワードをもとに、我々はいくつかの手立てやしかけを準備して新しい学びのスタイルを実践している。

３．新しい研修観とは

(1)　コンセプト１：「見ているだけ」の研修ではない

この研修会では、ワークショップを積極的に取り入れている。グループで課題に対して限られた時間でディスカッションするというものである。受け身の人は置いていかれる。大学の先生の話を聞いて勉強になったというようなタイプの研修会ではない。主役はあくまでも参加者である。

最近の会では新しい試みに挑戦した。表１のように、ワークショップを「調べる・共有」「創造・まとめる」「伝える・評価」のように、三段階のステップに分けてデザインし、2日間のプログラムの間にうめこんだのである。最初は、さまざまな意見が飛び出す中で戸惑い顔だった参加者も、ステップを追うごとに生き生きとした顔に変わっていく。そして、最後にひとつの形になっていく醍醐味は、きっと参加した当事者にしか味わえないものかもしれない。図１は発表の様子である。

表１　３段階でデザインされたワークショップ

ステップ	テーマ	活動
第１（1日目）	協働・・・こんなことが障害になる	調べる・共有する
第２（1日目）	私たちはどんな協働を求めるのか？	創造する・まとめる
第３（2日目）	私たちのイメージした協働はこれだ！	伝える・評価する

図１　ワークショップでの発表

更に、参加者には表現の場がいくつか用意されている。その限られた時間でどう表現するのかは各参加者の工夫次第である。そのひとつの場がアピールタイムである。一人の持ち時間は 15 秒。発言が終わっても、終わらなくても 15 秒で無常にもベルがなる。アピールタイムは 2 回あるので、失敗してもやり直しや趣向を変えての挑戦も可能である。

(2)　コンセプト２：「教員だけ」の研修ではない

この研修会の参加者の３割程度は企業人である。どのグループも教員と企業人が混ざるような形で構成されている。そのほかに、ＮＰＯの方々や学生たち、マスコミ関係者なども混ざっている。図２がその様子である。学校の中の論理だけではなく、外からの目が容赦なく注がれる事になる。企業側も、商品等に対する現場の声をダイレクトに聞くことができ、お互いが切磋琢磨されていくのである。

(3)　コンセプト３：「その場限り」の研修ではない

この研修会の前には、参加者によるメーリングリストが設置される。事前のアピール、情報交換などを経て、研修会当日を迎えることになる。研修会後も一定期間メーリングリストは続き、さまざまな感想の交換や次回に向けての建設的な考えが共有される。つまり、研修会に集う人たちの「コミュニティ」を構成しているのである。第 3 回では開催前の約 20 日と開催後の約 10 日の計 30 日足らずで約 700 件近いメールが流れている。

(4)　コンセプト４：「無評価」の研修ではない

このような疑問をもたれた事はないだろうか？研修会に参加した後でアンケートに回答することはよくある話である。その時、「この回答はどう受け止められどう反映されているのだろうか？」と言う疑問である。
アンケートはこのような参加者の要望や提案、満足度などを受け止めるひとつの手段として重要であり、研修会を企画・運営する側の評価でもある。我々は評価につながるさまざまな情報を重要視している。毎回、以前の情報や時代の流れなど周りの情報をふまえて次の研修会の内容を企画している。更に、そのフィードバックを評価して下さった参加者へ伝える事も、参加者の参加意識を高める上で重要であると考えている。

図２　立場の違う人同士で

４．参加者の声から

ここでは、企画・運営する側の評価でもある参加者の実際の声をいくつかご紹介する。
・この会に参加されている皆様の姿勢とパワーには本当に感心するものがあり、その点が何よりも勉強になった。
・思うようにいかない毎日だったが、すばらしい実践をたくさん見ることができて新たな意欲がわいてきた。
・ワークショップではグループのみなさんとの一体感や参加したという充実感がある。
・この会のすごいところは，２００５年の教室をめざして，教師と企業が一緒になって考えるところだ。
・企業の立場や考え方がわかる機会になった。
・会の運営の仕かけがとても参考になった。
・参加するたびにどんどんとバージョンアップする研修会なので次が楽しみである。

５．みえてきたもの

ここまで、参加型、協働、コミュニティ、評価等をキーワードにした新しい研修観における手立てやしかけを紹介してきた。その中からみえてきたポイントをキーワードの観点からいくつかあげてみたい。

キーワード	みえてきたポイント
参加型	「主役は参加者」「発表の場」「調べる、創造する、まとめる、伝える、評価などの活動」
協働	「学校の中だけの論理ではなくいろんな立場の人が参加する活動」
コミュニティ	「その場限りではない継続的な学び」「コミュニティを参加者の意識づけへ生かした学び」
評価	「参加者からの評価」「評価のフィードバック」「評価によって成長しつづける会のデザイン」

例えば、ここで「参加者」を「子どもたち」と置きかえてみたらどうであろう。新しい学びへつながるヒントが見つかれば幸いである。実際には、このような興味深い動きがあった。現場の先生が子どもたちにワークショップを実践したり、教育センターの方が研修でワークショップをとりいれたりと、この研修会での「新しい学びのスタイル」を日常にいかす参加者が現れたことである。我々は、この動きをひとつの重要な成果ととらえて、もう少し時間をかけて追いかけていきたいと思っている。

６．今後の展望

この会の活動が、今、各地域への広がりをみせている。現在、山形・宮城、石川、中部、和歌山、九州の支部が立ち上がり始めている。また、この会をきかっけにして「産学官の協働プロジェクト」が生まれてきている。

２００５年には、この会をはじめてとして、学校の授業や各地の教育センターなどの研修スタイルはどんな姿になっているのであろうか？この会の姿、それは我々にもわからない。また、完成というゴールもないであろう。この**「２００５年の教室を考える会」**は、参加者と共につくり、開催するごとに少しずつ成長し、いつも新しい事に挑戦していく会であるから・・・。

参考）２００５年の教室を考える会とは？

静岡大学情報学部の堀田龍也、金沢大学教育学部の中川一史がツイン・トップでリードする研究会である。ハードウェア・ソフトウェアが各学校に整備される２００５年のために、実践をする人、それを支援する人、メーカーの人などが、お互いの悩みや努力を知ることを通して、フランクに意見交換したり、共同で開発・実践をするための人間関係づくりを最大の目標としている。企画・運営は、静岡大学堀田研究室、金沢大学中川研究室、Web 学級日誌授業活用研究会（バディ・コミュニケーション株式会社）の共同プロジェクトチームで構成された**「２００５年の教室を考える会実行委員会」**で推進している。第１回は昨年の２月に開催され、この１年の実施回数は３回を数える。それぞれの開催日や参加人数は表２の通りである。

表２　開催日と参加人数

回数	開催日	参加人数
第１回	2002 年 2 月 10 日 - 11 日	約 110 名
第２回	2002 年 7 月 20 日 - 21 日	約 140 名
第３回	2003 年 1 月 25 日 - 26 日	約 170 名